滞日外国人女性の配偶者選択
― インタビュー調査の事例からの考察 ―

ロジナ　ナターリャ

Ⅰ　研究背景と先行研究

日本社会の国際化が進む中、外国人の人口が増えてきている。他の諸外国と比べ、日本は外国人労働者の受け入れが極めて制限されている。実習生や研修生の受け入れは移民の隠れ蓑（塚田、2010）だと言われており、日本社会に暮らす外国人は雇用機会や職業達成や住宅取得の機会も乏しく（落合、2007）、経済展望・社会的展望が見えづらい（李、2009）。

外国人の労働のみならず、日本で生活する上ではその他の諸問題が付随して発生しかねない。「労働者を呼んだのに、来たのは人間であった」（Wir riefen Arbeitskrafte, und es kamen Menschen）というドイツ語の表現があるように、公的領域だけでなく、私的領域の諸問題が存在する。その一つとしては家族形成も考えられる。

外国人の場合、家族形成について語る際、家族滞在以外のケースでは国際結婚が思い浮かぶ。アメリカやカナダなど多文化主義の社会では異なる民族や文化の男女の結婚が珍しくないのに対し、日本では国際結婚の件数が増えているものの、国際結婚という表現が未だに使われている（嘉本、2001）。国際結婚が年々増え続けているが、日本人男性と外国人女性の結婚の割合が高い。外国人妻の国籍を見てみると、「中国」、「フィリピン」、「韓国・朝鮮」、「ペルー」などが多く、日本よりも生活水準の低いアジア諸国が目立つ（厚生労働省、平成22年版「人口動態調査」）。

日本人男性と婚姻により、日本人配偶者という在留資格で新規入国する外国人女性も多くなってきている（落合、2007）。既存研究の中の外国人女性は日本人男性の配偶者としてはまず「家事労働者」として「結婚移住者」または「農村の嫁」という形で研究対象として取り上げられてきた。未婚の外国人女性は性産業従事者として性の商品とされてきた。そんな彼女は貧しき国から富める国へまたは本国の貧困と政治的不安定から移動し、いずれ日本を去るはずの定住者でない彼女らは危険な集団・排除と監視の対

象（大野、2008）として見られてきた。

外国人女性の出身社会と日本社会の経済格差を背景にして日本人男性の経済政治的な優位性（篠崎、1996）または先進性（竹下、2000）が指摘されており、日本人男性との結婚は在留資格の変化・生活基盤の変化または安定をもたらす（西口、2009）と言われてきた。日本人男性との結婚は不利な生得的地位のリセットまたは期待（賽漢卓娜、2007）となると指摘され、彼女たちは恋愛感情への期待値が低い（山田、2010）とも言われてきた。

配偶者選択は一般的には同じ言語または同じ国、同じ年齢や学歴などの制約があると言われてきた（佐藤、2010）。配偶者選択または結婚相手を探し、様々な活動すること、婚活の必要性もその現象が日本人以外の人には理解しにくいとも言われ、なぜならば交際相手を見つけるために積極的に行動することは当たり前過ぎて、今更言葉にする必要はないことと、結婚にこだわらないライフスタイルが確立されているからである（山田、2010）。

本稿では日本に暮らす結婚していない外国籍女性の語りに焦点を当て、彼女たちの結婚観に着目することとする。日本人男性と結婚しておらず、日本社会で暮らす女性に着目した研究は数少ない。既存の研究では日本で正規労働者として働く外国人女性は疎外感または排除感を抱く（Setoh、1998）と指摘されており、彼女たちは孤立感または差別（石河、2006）を感じるなど指摘されてきた。

本稿の事例の彼女たちは日本社会の生活者としてどのように結婚を思い描いており、これからの配偶者選択は日本で行い、ライフステージの結婚を日本人と考えているだろうか。もしそうであれば、配偶者選択過程においてどのような制約を抱えているだろうか。ここで取り上げる事例の中では彼女たちの生の声を通して、日本の結婚または配偶者選択を多角的に考察するには一つの手掛かりになろう。

II　調査概要

本稿では、日本に暮らす結婚していない外国籍女性の語りに焦点を当て、インタビュー調査を通して日本の結婚市場、その諸問題を浮き彫りにするために表１の通りインタビューを行った。2010年５月から現在まで継続中の調査ではあるが、結婚に対する意識と行動について半構造化インタビューを実施しており、この場を借りて中間報告としたい。筆者と調査対象者

のやりとりは日本語または英語で行い、調査対象者は両方意思疎通が困難な場合、調査対象者の母語者に通訳を依頼し、記録をとることとした。対象者とは外国人が携わるような教育や医療の分野、研修の受け入れのある民間企業などを訪問し、紹介の依頼をした。異なる属性から日本社会に生きる外国人の一般化できるのではないだろうか。先進国または非先進国出身者別で分析を進めるのが適切であろうが、ここではそういう基準を設定せず、日本社会で暮らす外国人女性という枠組みで考察をすることとする。

表１　インタビュー対象者

ID	年齢	国　籍	婚姻状態	最終学歴	来日 きっかけと時期	現在の生活状況
A	34	イギリス	未婚	大卒	2001年 英会話教室に就職	継続して英会話講師の仕事に従事
B	35	インドネシア	未婚	大卒	2004年 短期大学に留学	日本企業で正社員 （４年目）
C	27	ロシア	未婚	大学院卒	2006年 大学院留学	日本企業で契約社員 （１年目）
D	34	ロシア	未婚	大学院卒	2005年 大学院留学	日本企業で契約社員 （３年目）
E	30	中国	未婚	高卒	2009年 工場研修	日本企業工場で研修
F	26	インドネシア	未婚	専門学校卒	2009年 看護研修	総合病院の看護研修
G	39	インドネシア	未婚	専門学校卒	2005年 日系人	工場勤務

Ⅲ　未婚の外国人女性の配偶者選択過程と結婚像

１）持ち寄った意識

外国生まれの人はある程度の年齢に達しており、中等または高等教育を終えた者が圧倒的に多い。それゆえ、それまで異なる環境において形成された価値観などを持ち込むことになる。恋愛観または結婚観もそうである。

日本は男女の出会い領域は職場または学校など多く占めており、その他には友人の紹介やバイト先などが多い。しかし海外では異なる男女の出会

いのきっかけが少なくない。

日本は恋愛結婚が多数を占めるが、未だに見合いが存在する。見合いは男女のフィーリングが合えば、その後のパートナシップのきっかけとなり、最終的には恋愛結婚に結びつくこともあろう。しかし見合いの場合は男女のフィーリングなどよりも条件が重視される傾向が強い。双方の条件が合えば、その後の関係性構築の過程が始まる。見合いという伝統文化が日本で長い歴史を持っており、今の未婚男女の親世代も見合いで結婚している可能性もあるため、心理的な壁がそうはないかもしれないが、見合いという出会い自体はあまりない国の人には異質的なものかも知れない。

Dさん：「見合いはあり得ないし、愛の無い結婚とか私の中ではありえないから。相手の経済力という条件で決めるとか、そういう立場は共有できないから」

Aさん：「ホームステイ先のお母さんがたまに言ったね。どうですかとかね。でも、させなかった。私はしっかり断ったから。お見合いというよりも、同じ人を何回も紹介しようとした。私はしっかり断ったからお母さんもやめた。断ったというよりも、食事した時はちゃんと説明しました。「イギリスではお見合いはしません。イギリスでは結婚は自然に出会って…イギリスはラブラブして結婚するけど、ここは契約みたい。本当！」

Aさんは人為的に作られた空間で異性と出会うよりも自由な恋愛市場に出て、そこで自分の力で相手を探し求めたいという。彼女は友人との飲み会や合コンなどの集いに参加してきた。しかしそこでは彼女は壁に直面してしまう。それは自分が外国人という異なる者としての扱いである。主に食文化の違いから発生する違いであるが、食べ方などという点では異質性を気付かされ、疎外感を感じる。またAさんは日本人とは人種の異なる者という点も働いている点もあるかもしれない。

Aさん：「日本語うまいね。箸使えるね！って。そういう人多い。女性じゃなくて、欧米人を見て、日本人は宇宙人として見てる。それはムカつく。もしね、相手があなたを宇宙人として見たら、話できない。それは一番問題。女性じゃない。宇宙人とか」

２）恋愛行動と家族形成

恋愛行動は男女のパートナシップを形成するために出会った後の交際過程を意味する。双方の意思に基づき、フィーリングが合い、交際過程に入る二人は恋愛していく。恋愛は双方の相互作用が欠かせない。そこには情緒的な行動が求められ、二人が何らかの形で愛情を表現していく。

Ａさんは現在、結婚していないが、過去には様々な形で恋愛をしてきた。彼女は交際相手の愛情表現に違和感を持った。

Ａさん：「愛してたけど、結婚はしたくなかった。あの人が独身でも。考え方が違うからね。考え方は日本人だし、仕事中心だから。忙しいから。外で抱き締めてくれない、愛情を表せないね。たまに言うね。だけど、浅い。あの人は長年外国住んだことあるし、英語しゃべれるし、あの人の性格が面白い。話がすごく楽しい。冗談できる。デートだけだったらすごく楽しい」

Ａさんは法律婚よりも事実婚を望んでいる。また共働きで、二人で過ごす時間を重視する。彼女の中の男女パートナシップの構造は現代日本社会では非常に困難かもしれない。求める理想像と現実との乖離は大きい。

Ａさん：「事実婚、日本ではあまりないし、平等じゃないから。私は自分のお金あるから、そんなに。普通の人。９時から５時まで仕事して、夜と週末は家族で。ファミリーマン。仕事より家族に興味がある人がいい。だから日本人と結婚できない」

恋愛し、結婚し、出産するというイメージがＡさんには湧かない。社会環境の異なるところで安心して出産し、子育てするという意味では困難だという。言語的なやりとりが充分にできないかもしれないという不安に限らず、出身国、イギリスでは出産と子育てのための環境は日本より整っている。女性の職場復帰も可能な環境では子育てに拘束されることもなく、自分の職業アイデンティティも充分に保てる。その点では、日本で結婚してから出産し、子育てするというライフステージは現実的には考えにくい。

Ａさん：「結婚して赤ちゃん生まれたらいいね」とお母さんいうね。長年ここに住まな

いし。赤ちゃんとかできたらここでは育てたくないね。赤ちゃん生まれたら帰りたくなると思う。病院で100％分からないからパニック。イギリスだったら全部分かる。医者さんに言える。意見。ここでは出来ない。言葉のこと。あと、ここはよくない（出産・子育ての環境の不備）。ここで産後一週間くらい入院しないと。妊娠したらすぐやめるでしょ、ここ。イギリスは6ヶ月まで仕事して、生まれて次の日に帰らないと。ベッド少ないから。出産はただ。ここはお金かかる。私はパートナーと住んでて、子供とかできて、友達と旅行したりとかしたいけど、ここはできないでしょ。いつか誰かの奥さんになる。誰かのお母さんになる。それだけ。赤ちゃん生まれたら何とかママになるでしょ。イギリスは違う」

Ⅳ　配偶者選択過程における制約と困難

1）言葉の壁

Gさんは血縁者には日本人がおり、2005年に日系人として来日し、それからずっと工場で働いており、機械操作の仕事に従事している。雇用形態上ではアルバイトとなっている。彼女は前から海外で働きたい願望を持っており、来日する前にシンガポールのホテルでの仕事していた。契約期間満了後、帰国せざるを得なかった。気候や本国と地理的に近い点では帰省しやすく、言語的な面で不自由することなく、壁がなかったからだという。その後、オランダで一年間、ホテル業界の研修をし、日本に来るまではいろいろな形で海外生活を繰り返してきた。

そして日系人を親戚に持つ父親の提案で来日した。Gさんは日本の文化や日本語の学習は来日する前はしておらず、特に興味があったわけでない。来日して3ヵ月の間、日本語の勉強もするが、その後は必要性ないため、していない。そういうことを受け、日本語の壁のため、親密な日本人の友達はいない。

Gさん：「知り合いはいるが、親密な友達はやっぱり自分の国の人とかですね。言葉の意味では、日本語はあまりできないし、英語も自由に使えないから」

日常生活では異性アクセス可能な環境にいるが、日本語では充分にコミュニケーションとれないこともあり、壁となってしまう。彼女は過去の恋

愛行動では本国で交際相手がおり、シンガポールへ仕事で行った時も中国人男性と交際をしていた。いずれも母語または英語でやりとりができた。日本語でのコミュニケーションは困難である。それゆえ、彼女は交際相手不足に悩まされている。

2）宗教の壁

Ｆさんは日本の国立病院で看護の研修をしている。

結婚願望もあるが、交際相手もいないので、具体的に考えていないという。結婚相手には同じ宗教信者という条件を設けている。

Ｆさん：「私の出身地が非常に宗教のことを気にするので、日本人ではムスリム教の日本人がいませんので、無理だと思います。もしも他の宗教の人と結婚することとなった場合、家族がもちろん反対すると思います。同じ宗教の人に出会いたいです。イスラム以外の場合、手続きが難しいので。またイスラム教では、イスラムは他の宗教の人と結婚できないので」

Ｆさんは日本語がほとんどできず、日常的な会話などは英語で行う。研修上簡単な日本語を覚え、もう一人の看護研修生と日本語教師に日本語を教えてもらっている。言語的な壁は突破できる可能性があるとしても、宗教の壁が大きい。

3）結婚活動へアクセスの壁

Ｅさんは中国からの研修生として来日し、現在、工場で裁縫の仕事に従事している[a]。研修のプログラムに応募したことも、日本で結婚相手を探せると思ったからである。彼女の姉が日本人男性と結婚し、パートをし、実家に援助しているという。他に兄弟６人もいるが、一番援助できるのは姉だけだという。姉は親戚の紹介で病院勤務の日本人男性と結婚し、一人の子供も設けている。姉は「幸せだから」と発言し、日本人男性と結婚したいという願望を持つ。

研修の時間が拘束され、生活圏では中国の仲間と過ごすという生活パタ

---

[a] Ｅさんとは通訳を通してインタビューしたため、語りを他のサンプルとは違う形式である。

ーンでは、異性との出会いも結婚市場へのアクセスが限られているが、自由に使える時間には彼女は配偶者を求めて活動をしようとする。彼女は一度、結婚相談所の業者の仲人に誘われ、見合いパーティーに参加する。それは男性50人に女性40人の100人の参加者のいるパーティーで、そのうち10人の中国人女性も参加していたという。

限定された時間で日本語があまりできないため、異性とは話しはできなかった。最終的には仲介者への成婚料が設定されているため、パーティーも何回か見合いをしたが、結婚に結びつかない。Ｅさんは日本に来て２ヶ月くらいしか勉強してなく、言語の問題があるので、結婚の話しはうまくいかないという。結婚活動をしたことは業者が中国出身の女性で、母語でやりとりできたこともあり、信頼関係が構築できた。

彼女の結婚難は言葉の壁のみらならず、相手の男性からしたら属性のこともあると考えられる。しかし本人の中では、結婚は日本でより良い生活するだけでなく、本国にいる家族を助け、大きいライフチャンスのような位置づけである。

彼女は希望を捨てない。帰国してから日本語の勉強もして、今後も業者の行うインターネットで遠隔見合いもするつもりだという。しかし日本人男性との結婚が多くの中国人女性にとって大きなチャンスという背景には中国で結婚詐欺事件が多発しており、良い結婚の可能性はそうない。

４）出会いへのアクセスの壁

日本に暮らしながら言語や宗教の壁があり、結婚相手または交際相手に巡り合えない未婚の外国人女性の配偶者選択の過程を見てきた。

Ｂさんは数年前に来日し、母国のインドネシアでは大学で日本語を勉強しており、学部時代は日本の国立大学に国費留学した。語学留学だったので、日本語の勉強をして、本国に帰ってからは大学を卒業し、そして再度日本へ行くことを決意した。日本には留学ビザをとるために短期大学に入り、卒業後にはインドネシアから研修生を受け入れる企業に正社員として入社した。

結婚相手は同国の人だと決めている。しかしそのような人に出会える可能性は極めて低く、他の似通った文化圏の人とは交際が難しいと考えている。

Bさん：「もし選べるとしたら母国の人がいい。知り合いはいるけど、留学に来て就職している人もいる。20代から30代の人たち。同国の文化財団では時々イベントやってる。大きいイベント年一回しかやってない。連絡先交換することはあるけど。でも、同国の男性は仕事している人は大体結婚している。日本人と結婚している人とか国から彼女を日本に連れてきたとかで…国の友達ではスリランカ（文化が似ている）の人と付き合っている人がいる。宗教が問題になったみたい。私なら面倒くさい。文化も違う。宗教は好きな人なら気にならない」

Bさんは日本人男性とは出会いもないことと、日本人とのネットワークは元々あまり持っていない。

Bさん：「今の私の世界が狭い。企業と研修生。勤務先と家の往復。一番近い人たちは研修生。他は日本語学校の人とか。でも、皆帰っていくから。日本人は知り合い。その程度。日本人の友達といると、疲れるね。ありのままでいられないね。日本人とあまり遊んでないね。社交辞令ばかり」

Bさんは自分の年齢も結婚へのもう一つの壁だという。バイオロジック・クロック（上野、2004）は生理的な特徴として世界の女性に共通の問題として指摘できるかもしれない。年齢が上昇すると、生殖機能が衰退していくことが想定されるため、相手の男性から潜在的結婚相手として認めてもらいにくくなる可能性も大きくなるからである。結婚相手の適格者不足に見舞われ、結婚の壁が高くなっていく。

Bさん：「なかなか難しい（結婚相手探すの）今の日本では。私も年齢的に・・・年下も嫌ですし。いろいろ違うから。仕事先の課長には一回、あなたもいい人に出会えってほしい、幸せになってほしいと言われたことがあるね。でも、課長は中国人だから、帰化しているからもう日本人だけど、ネットワークあるかは分からないし、紹介されても断る時はつらいじゃない。研修生は皆、高卒だし」

しかし配偶者選択は相手の年齢などの条件のみならず、学歴や職業などの設定もあるため、自分と同等な学歴またはそれより上のことを求める傾向がある。Bさんも身近にいる研修生の男性では学歴の高い人はいないた

め、考えにくいと語っている。

日本人は職場や学校などで出会い、それがきっかけに交際をし、結婚に結びつくケースも稀ではなく、友人による紹介も一つの出会いである。しかし外国人には友人いても、紹介は難しいこともある。Cさんの場合はそれが難しい。

Cさん：「見合いの話しは来ないね。そんな話を持ってくる人はまずいない。しかし今、前に行っていた見合いパーティーはもう行ってないから。友人とかからのお誘いだったら、私は外国人だと知っていて、外国人が来ていいというような感じだったら行きやすいけど、そんな機会もない」

Ⅴ　まとめと今後の課題

先行研究の多くは既婚外国人女性を対象としており、描かれてきた外国人女性は日本人配偶者として様々な苦難に直面している。その中では外国人女性の結婚は概ねライフチャンスとして捉えられてきている。

しかし本稿で取り上げた未婚外国人女性の事例を通しては彼女たちの様々な葛藤などが浮かび上がった。本稿の未婚外国人女性は配偶者選択過程においては様々な壁に直面していた。

Gさんのように言葉の壁であり、Fさんのように宗教の壁であり、日本の結婚事情を受け入れることのできないAさんとDさんのように心理的な壁がある。言葉または宗教など異なる相手との相互作用も困難だと考えられる。しかし一方、実際に異宗教結婚は存在している。または言葉なども学習により突破できるような壁だとも考えられる。

日本人のように出会いを求め、結婚活動をし、結婚に結び付けたいというEさんとCさんはアクセスの困難に直面している。日本人女性と同様に自分が選ぶ相手から選ばれないなどの魅力の格差に直面する部分を共有するであろうが、彼女たちの前には目に見えない壁があり、自由な結婚活動が難しい。その壁を突破するためには何の解決法も手段もない。彼女たちはそんな資源を持たない。彼女たちの属性により経済的な基盤や在留資格の拘束が異なってくるが、それぞれ同じ問題に直面していることには間違いない。彼女たちは未婚女性としては日本人女性と同様に制約を抱えつつ、

異性愛を望みつつも交際相手ができないため、未婚状態を継続せざるを得ない。しかし異性愛のみならず、外国での暮らしの中では不安定な立場から脱却させてもらえる救済者の男性を求めることもあろう。これはEさんの事例では特に明確である。社会経済的安定のみならず、現在の生活はある程度安定しているが、心理的に安定しないという未婚外国人女性もいる。

それなり安定した境遇であれば、配偶者選択にも余地も広がるはずである。しかし配偶者探索が長期化するにつれて、「お似合い」の相手の数も減るであろう。外国人女性の属性は元々、変え難い故に配偶者選択では非常にマッチングしづらい。

それに限らず、未婚者に共通する点として一定の年齢まで結婚すると、社会的評価も保て、結婚によるネットワークの拡大または社会との接続がより確実になろう。そうでないと、脆弱存在として孤立し兼ねない。日本社会からもポジティブに承認されないであろう。日本社会に暮らす外国人は社会経済的展望のみならず、今後は配偶者選択の展望も見えづらくなるであろう。

ここでは紙幅に制限があり、詳しく言及しないが、既婚外国人女性の配偶者選択についてより深く調べる必要がある。それにより新たな知見が浮かび上がらせ、配偶者選択について考えていきたい。

参照文献

李芻任(2010)：日本企業における「ダイバーシティー・マネジメント」の可能性と今後の課題、龍谷大学経営学会経営科学論集、49(4)、pp.68-82.

石河久美子(1998)：滞日外国人女性を支援するソーシャルサービスの必要性、日本福祉大学研究紀要、99、pp.(49)192-(65)176.

大野聖良(2008)：「ジャパゆきさん」をめぐる言説の多様性と差異化に関する考察 ―雑誌記事の言説分析をもとに―、お茶の水女子大学人間文化創成科論集、11、pp.467-476.

落合恵美子・カオリ リャウ・石川義孝(2009)：日本へ外国人流入から見た国際移動の女性化国際結婚を中心に、石川義孝『人口減少と地域：地理的アプローチ』京都大学出版会、pp.291-319.

嘉本伊都子(2001)：『国際結婚の誕生「文明国日本」への道』新曜社.

賽漢卓娜(2007)：中国人女性の「周辺化」と結婚移住 ―送り出し側のプッシュ要因分析を通して―、家族社会学研究、19(2), pp.71-83.

佐藤博樹・永井暁子・三輪哲(2010)『結婚の壁 ―非婚・晩婚の構造―』勁草書房.

篠崎正美(1996)：国際結婚が家族社会学研究に与えるインパクト 家族社会学研究、8、pp.47-51.
Setoh Cyndey (1998)：日本に居住する外国人女性に関する調査 ―差別とセクシャルハラスメント―、神戸女学院大学論集、45(1)、pp.111-147.
竹下修子(2000)：『国際結婚の社会学』学文社.
塚田典子(2010)：『介護現場の外国人労働者 ―日本のケア現場はどう変わるのか―』明石書店.
西口理沙(2009)：フィリピン人女性の滞日形態、グローバル都市研究、2、pp.157-174.
山田昌弘(1996)：『結婚の社会学 ―未婚化・晩婚化はつづくのか―』丸善.
山田昌弘(2008)：『婚活時代』ディスカバリー.
山田昌弘・白河桃子(2010)：『「婚活」現象の社会学 ―日本の配偶者選択のいま―』東洋経済新報社.
山田昌弘(2004)：『若者の将来設計における「子育てリスク」意識の研究』厚生労働科学研究費補助金政策推進研究事業報告書.